



農の未来ネット

NO.29

特定非営利活

動(NPO)法人「農の未来ネット」

理事長：倉本器征(東京農工大学名誉教授)

発行責任者：田沼 繁(NPO法人農の未来ネット事務局：電話&FAX 042-313-3620)

編集長：西村正昭

<http://www.nou-mirai.org/index.html>

サロン学習会

「身近にある『都市農業』 を考える」の巻

「農の未来ネット」事務局長

田沼 繁

10月1日(土)13:30から、NPO食農研センターワーカズ・フェアビнденにおいて、「身近にある『都市農業』を考える」をテーマにサロン学習会を開催しました。講師は、武蔵大学経済学部教授の後藤光蔵先生です。参加者は18名。いつものことながら、和気相合の雰囲気での学習会は、はじまりました(写真)。

先生は、はじめに“都市農業”の定義について話をされ、これまで欧米など先進諸国では“都市農業”という概念はなかった。その意味で、日本の都市農業は先進諸国において特異的な存在なのだといいます。最近、農業の緑地機能、防災機能など多面的な機能を活かすため、イギリスのロンドンなどでは都市農業の動きがでてきているとのこと。

都市農業・農地の法制度上の位置づけの説明では、1968年の都市計画法により、市街化区域と市街化調整区域の線引きがあり、市街化区域は概ね10年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき区域にしたのです。これま

で、政府は幾多の制度上の変更を行い、市街化を図る努力をしてきました。しかし、当初の目論見とは大きな隔たりがあって、いまでも市街化調整区域が多く地域で残ったままとなっています。なぜ、政府が描いた都市計画が思うように進まなかったのでしょうか。そこには、都市農業の展開があったと、先生は説明します。地域内循環農業や交流型農業の取り組みや消費者の変化、何よりも都市農業の多面的機能の認識の深まりだと。たとえば、景観や教育、レクリエーション機能など。最近、国土交通省に設置されている社会資本整備審議会の都市政策の基本的な課題と方向

【写真】 講演する後藤先生(右)



検討小委員会報告書では、「都市と農地を対立する構図で捉える視点から脱却し」、「自然とのふれあい、憩いの場、防災機能として」積極的に評価すべきだとしています。これまでの都市計画法の位置づけを180度転換させるものです。先生は、農水省が今年10月から市街化区域内農地のあり方について、新たに検討をスタートさせるとしています。

日本の都市農業は、先進諸国でも特異的な

存在であるけれども、都市農業の多面的機能が地域社会に欠かせないものなのだと、身近に感じたサロン学習会でした。

福島県矢祭町を堪能 する現地ツアー

～矢祭町藤井酒蔵「ひやおろし」

を楽しむ～

10月15日（土）に福島県東南端の矢祭町の現地ツアーをNPO法人真・食の安全・安心支援機構と共催で実施しました。

開催の発端は、今年4月23日（土）に開催した「日本酒で町の活性化にトライ！～福島県矢祭町のチャレンジを知るの巻～」に遡ります。講演後の藤井健一郎さん（藤井酒造社



【写真】ツアー参加者のみなさん

長）との交流会で出たのが”ひやおろし”です。参加者から「今度はみなさんと藤井社長の”ひやおろし”を飲みに行こう！！」という話がまとまり実現したものです。

当日はあいにく強い風雨。にも関わらず、日本酒を愛する19名の猛者？の参加を得て一路矢祭町へ！。

新酒「ひやおろし」を楽しみを前に、まずは、藤井社長に酒米（品種：千代錦）を提供

している農業生産法人（有）でんぱたを訪問です。代表の鈴木正美さんからは、ご自身の営農状況を含めた地域の農業生産のお話や、原発事故による風評被害に遇いつつも、本当に地元を愛し、地元の人たちとともに安心して末永く、この地域での生活を生き生きと営んで行くのだ、と言うことを強く印象づけられたお話を伺いました（詳細は「鈴木正美さんのお話要旨」参照）。

続いて、酒蔵見学へ。藤井酒造は天保4年（1833年）創業。高い天井の下に大きな珓瑯（ほうろう）の酒樽がいくつも並びます。藤井社長曰く、建物内部全体に家付き娘（藤井社長命名：酒の酵母）がついており、これが大事な財産です。昔は各地域（町村）に酒蔵があったが、木製の酒樽だったため雑菌が付着し、一回雑菌に冒されると酒蔵の命運（倒産）は尽きた。いまでは、珓瑯を使うので雑菌は完全に除去されているとのこと。繊細な酒造りの厳しさを実感した次第です。



【写真】
説明する
藤井社長
（中央）

酒蔵の見学後は、お待たせした食事会です。藤井社長・杜氏の菊池朝三さん、鈴木正美さんも同席。会場は、お食事処さかな屋さんです。会場には、ひやおろしや地元の食材を使用した美味しい料理や刺身こんにゃくが並び、藤井社長や菊池さんによるお酌つきという贅沢なおまけつきで楽しい交流会となりました。

矢祭町を愛し、誇りに思う気骨のある方々との素晴らしい出会いを実感できる現地ツアーでした。本当にお忙しい中、温かく受け入れて頂いた矢祭町の皆様に感謝を申し上げる次第です！



【写真】”ひやおろし”を楽しむ参加者

でんぱた代表 鈴木正美さんのお話要旨

(有) でんぱたの加盟農家は35名。毎年の作付形態や農薬・肥培管理などについて、加盟農家の方々と話し合っ、米の契約栽培を実施し、(有) でんぱたに一元集約して、販売を行っている。

自分は元農協職員だった。10年前に近隣の町の農協との広域合併の話があり、合併によって自分が知らない土質に責任が持てないし、やりたくはないということで、他の仲間と話し合い、この農業生産法人でんぱたを結成した。矢祭町は地形等から1農家の米の平均作付けは5反。逆にいうと作付け面積が小さい分、水管理や肥培管理に手間をかけられ、病気発生の有無などの圃場観察が容易というメリットがある。そういう米作りだからこそ、丁寧に栽培ができ、それが付加価値となって、消費者の方々にも認められて矢祭町ブランドとして販売できてきた。矢祭町ブランドを守るためにどんなに収量が少なく、購入者の需要に応え

【写真】
説明する鈴木
代表
(中央)



られなくても、矢祭町以外のお米は一切ブレンドしない。これだけはどんなに苦しくとも仲間ともに信念として貫き通してきた。やっと経営・営農形態が形になった矢先、地震による原発事故が発生してしまった。町の東西を山脈に囲まれているため、県の放射能調査でも全く放射能が検出されていないのにも関わらず、つぎつぎと販売先から購入のキャンセルがだされている。放射能が全く検出されないことを証明するために2~3cmに及ぶ資料を自分たちで作成して販売先に説明しているが、難しい。他県の幼稚園にお米を販売していたが、園長先生から自分としては安全は了解しているが保護者の方から心配だとの声があり、購入出来ないとの連絡があった。非常に悔しい思い。国も県もマスコミも風評被害に苦しむ矢祭町をはじめとする風評被害地域に足を運ばない。このようななか、大手の外食産業の方からうちの野菜を使用したいとの話があった。感謝に堪えない。自分たちとしても支えになっていただける消費者の掘り起こしを懸命にやっているが、是非とも風評被害が現場・地域に深刻な問題をおこしていることを解って頂きたい。今後2~3年は風評被害がつづくという心配がある。安全・安心なのに風評被害が続けばなにをもって今後営農していけばいいのか。今日お集まりの皆さんにも風評被害の深刻さや実際の状況を是非とも発信して頂きたい。

矢祭町は人口が5万の時に3つの村が合併して誕生した。今では1年間に100人減少して75,000人になってしまった。世帯は減らないので高齢者が多くなっている。これ以上、町を荒廃させないために定年帰農を掲げて町作り今後ともやっていきたい。自分のところを経由して野菜や米を販売しているが参加している農家のお年寄りから「これでお正月に孫にお小遣いがあげられる」と自分の営農を糧にニコニコした感想をもらえる。自家消費が主体だった昔ではなかったことで、お年寄りが自分の営農に自信と誇りを持ってもらい、これが何よりも励みになる。

自分が矢祭町に生きて、今後とも地域が成り立つ営農を続けていくつよい心の支えになる。お年寄りも含めて流入人口の実現も含めてみんなが暮らし続ける地域作りを今後ともしていきたい。

参加者された方々の声

- 日本酒を楽しもう、くらいの軽いノリで参加させていただきました。しかし、鈴木社長の風評被害についてのお話は大変勉強になるとともに反省もさせられました。正直なところ一消費者としては、「うたがわしきは避ける」というのはまっとうな判断だと思ってましたが、当然ながらその陰で今日伺ったような現地の方々の苦しみがあることを実感しました。このようなツアーで実際に現地の人に会い、第三者の検査でも合格しているとのことがわかれば安心して飲食できますが、そうでもしなければ、どの情報を信じてよいか。そもそも自分から積極的に情報を取ってまで消費するというをしなかつたと思います。とはいえ消費者側に積極的に情報を取りにいかせることは期待できないので、このようなツアーや物産展等で地道なPRをしていくしかないのだと思いました。
- 受け入れてくださった矢祭町の皆さんの思いが伝わる会でした。温かい気持ちになるとともに楽しかったです。つい飲みすぎてしまうのがタマにキズでした。。
- 素晴らしい交流会でした。さかな家さんでのご挨拶の中で、これだけたくさんの団体の方が集まられたことにびっくりでした。南郷（藤井酒蔵）の見学はメイン企画であり、得がたいものでした。次回は酒造りの時期にもう一度きてみたいと思いました。また（有）でんばたの鈴木正美さんの地元農業の振興にかける思いと風評被害に関する話には、共感と同時に“がんばれ福島”の対極にある現実を思い知らされました。
- いろいろな方にあえてよかったです。好きなお酒中心の企画はよかったです。

- 日本酒の目標となるお酒＝ひやおろしに出会えてうれしかったです。ひやおろしを基にこれから自分にとっての他のお酒の「うまい」、「まずい」を見極めたいと思います。

編集後記

野田内閣は11月12日、13日にハワイで開催されるアジア太平洋経済協力会議（APEC）首脳会議で環太平洋経済連携協定（TPP）に参加を打ち出そうとしています。日本経団連の米倉弘昌会長は、野田内閣に対してTPP参加を繰り返し要求しています。それに呼応するように10月11日には「TPP交渉参加等に関する関係閣僚会合」を開くなど、野田内閣のTPP参加への動向が浮き彫りになってきています。TPPに参加した場合、関税撤廃で日本のお米の自給率が1割以下に落ち込み、9割が外国米で占められ、現在の39%から13%に食料自給率が下がると、農水省は指摘しています。TPP参加の問題は、今後の日本の国のあり方が問われる重要な問題です。国民に情報も知らせず、日本経団連やアメリカの要求にはこたえようとする野田内閣の姿勢はとんでもありません。これに対してJA全中などは「TPP交渉参加に反対し日本の食を守る全国決起集会」を10月26日に開き、さらに11月8日には東京・国技館で6,000人規模の「TPPから日本の食と暮らし・いのちを守る国民集会」を開催する予定です。食健連・農民連は10月からグリーンウエーブをスタートさせ、JAなども共同してTPP反対の運動を展開しています。また、農業分野だけでなく、医療、食品加工、運輸、地域経済の雇用にまで大打撃をあたえるTPP参加に反対する運動は、関係分野でも広がっています。TPP参加反対の声を大いに広げ、撤回させようではありませんか。私も多くの方にTPP参加反対を訴えています。（西村）

